伊勢參宮名所圖會

五上

和書門 類
二九〇二一 號
二二七 函
一三 架
六 冊

内閣文庫
和書 類
二九〇二一 號
一七二 函

内閣文庫		
番號	和	29021
冊數	6（5）	
函號	172	317

地
三
四

伊勢参宮名所圖會巻之五

目録

館
稜所
一殿 直會殿
御輿宿
第四御門
八重榊
内宮正殿 相殿二座
心御柱 内宮訓綴
百枝松
东宝殿 西宝殿
荒宮古殿

祢宜宿館
巌社遥拝所
忌火屋殿
玉串所
齋王候殿
玉串御門 瑞垣御門
蕃垣御門
西鳥居
興玉拝所石壇

内宮中
一鳥居 手水場
二鳥居 廳舎
荒祭宮遥拝所 外幣殿
外宮遥拝所 冠木鳥居
石壺 第三鳥居
御弦座の事 神路山
宿衛殿 八十末社
天津神社 國津神社
御稲御倉

内 一〇八四二號

一元社 裏御門 小玉垣御門 小鳥居 小端垣御門
御池
河原神社 由貴殿
子良舘 五十鈴川橋
末社 八百會遥拝所
川原祓所 落合川原
高倉殿 宮中終
磯辺迄 山神社
御贄小屋 一の瀬
長尾 祖松石 獅子巌石 鮎留石
瀧祭窟 家立茶屋
宮川 鸚鵡石
伊雑宮 大蔵宮 猿田彦社 飯毎る社

荒祭宮 同宮前東西遥拝所
川島神社遥拝所 桜宮
酒殿 朝庭遥拝所
價尼拝所 風宮
瀧祭宮 瀧宮並宮
河合社 御廐
石井神社 荒木田氏社
三方石 杦坂
合坂 猿田彦森
甑石 鼎石
恵利原
朝熊迄
楠部嶺 一宇田嵓 笹原嵓 弘法茶屋 天狗岩

朝熊嶽 岩舟 弁天 万金丹 下乗
勝峯山金剛證寺 義鈴佩刀 文殊堂 求聞持堂 極楽橋
熊野三社 子安地蔵 阿弥陀堂 二王門 連珠橋 連珠池 雨宝童子宮
明星水 手向地蔵 経ヶ峯 龍池 寺院 芭蕉塚 稲荷社 舎利塔
開山堂 東岳和尚像
七社神 朝熊村 永松庵 秋田城之介実季墓 福原右馬之介墓
小朝熊社 朝熊森 櫻木里 鏡宮
蛭川村 鹿海社 汐合 汐合濱 破石
山田原 西行法師旧跡 隼人古墳 三津浦 三津村 岩石 五峯山密巌寺
濱荻 鷺島 亀ヶ売 竜宮祠 九山 姫小松 御座石 伊勢三郎宅地 硯石
とうろ石 堅田社遥拝所 出口村氏社 音無山
立石
西行松 旧城
二見迄
河崎 河辺里 二軒茶屋 黒瀬
常村子 通村 箕曲氏社 天神社 神社村
御食社 三枚橋村 大津社 小林社 御祓所
大湊 鶴原清水 志賀屋社 八幡宮 今一色村 高城濱

内越濱　清渚　御塩殿　立石崎

二見浦　興玉石　鎮石　乳母懐　江村　湖青山大江寺

江神社　蘇民明神　亀ヶ岩　松下　蘇民社　蘇民松

嶼嶋巡覧

許母利神社　神前山　神前岩　種蒔岩　笏立石　潜岩

多易濱　伊気浦　粟皇子社　阿波良岐浦　神浦　添瀬

小濱　岩下　有瀧　由貴浦　宿浦　神津佐　荒磯　㟢柄　礫浦　相賀

阿曾浦　日和山　佐田濱　鳥羽浦　波賀地濱　酢我浦　伊良御浦

舘町 橋の東の所なり

宜敬戒斎籠の舘舎也　神庫 宿舘の南にあり　禰宜宿舘 の鳥居先にあり 十員の禰

一鳥居 御宮の入口又外宮一の鳥居より四十三丁ま之延喜式に七里といふ一里ハ六丁一里の例をもて記せり 是より此へ杖 佛具を持ず 鳥居のうちも奈りといへり

手水場 一の鳥居より入て右の方に五十鈴川の流れ之 風の宮の前の流れと殿石の方の流れとの落合也 此辺を又五十鈴川の落合といふ

上古ハ今の鳥居の外をいへり又此所の瀏を川合瀏ともいふ落合也の名なり ○殿不 二の鳥居より左向に前の石壇なり 昔ハ勅使此所にて修

禊ありしと之今ハなし斎宮の所此所になるに修禊を悉せるはじめにて

○巖社遥拝所 殿所の次に有る 本宮ハ岩井の神社とて宇治山田岩井田山にあり

高水上命 大水上の児 此神社ハ宮中の神にて在俗に一の宮といふ

二の鳥居 一の鳥居の次の鳥居也 勅使参向の所此所にて大麻御塩湯を献ぞ

廳舎 二の鳥居を入左りにあり

一殿 太石の左の方にあり 此殿ハ勅使の直會殿也 一殿とハ直會院の第一殿といふなり

外宮にてハ是を又九丈殿と云 則九丈殿の二字 額並に古書に此殿

五間とあれども今ハ三間之柱十本あれ十柱殿と俗称せり

忌火屋殿 大神宮の御饌を調へ奉所にて十三度此所にて備ふる之両宮の御饌

殿ハ外宮にあり外宮ハ朝夕に備へまつれども内宮ハ朝夕なし 十三度の御饌とハ正月一日七日十五日三月三日五月五日

六月十六日同十七日九月九日同十六日同十七日十二月十六日同十七日同十八日

荒祭宮の遥拝所 忌火屋殿の東の石壇なり　荒祭宮へ参詣ハ宮にて

外幣殿　御輿宿 太石の右の方にあり 齋宮輿をとゞめ給ふ舎也又玉串乃

納るを為天なれど此所にて納めて御〇玉串行事所 御輿宿の前にて御門外の儀式

豊受神石疊 冠木の鳥居の南の方にあり 世を御稜威に云傳ふ小社也　昔ハ心殿の南に奉る道の又十

の二殿におゐがきし 其中の洲に石疊を作りて黒木の橋を架

三節の祭ごとに御饌供進せり 洪水のときたびたび流れて後今の所に

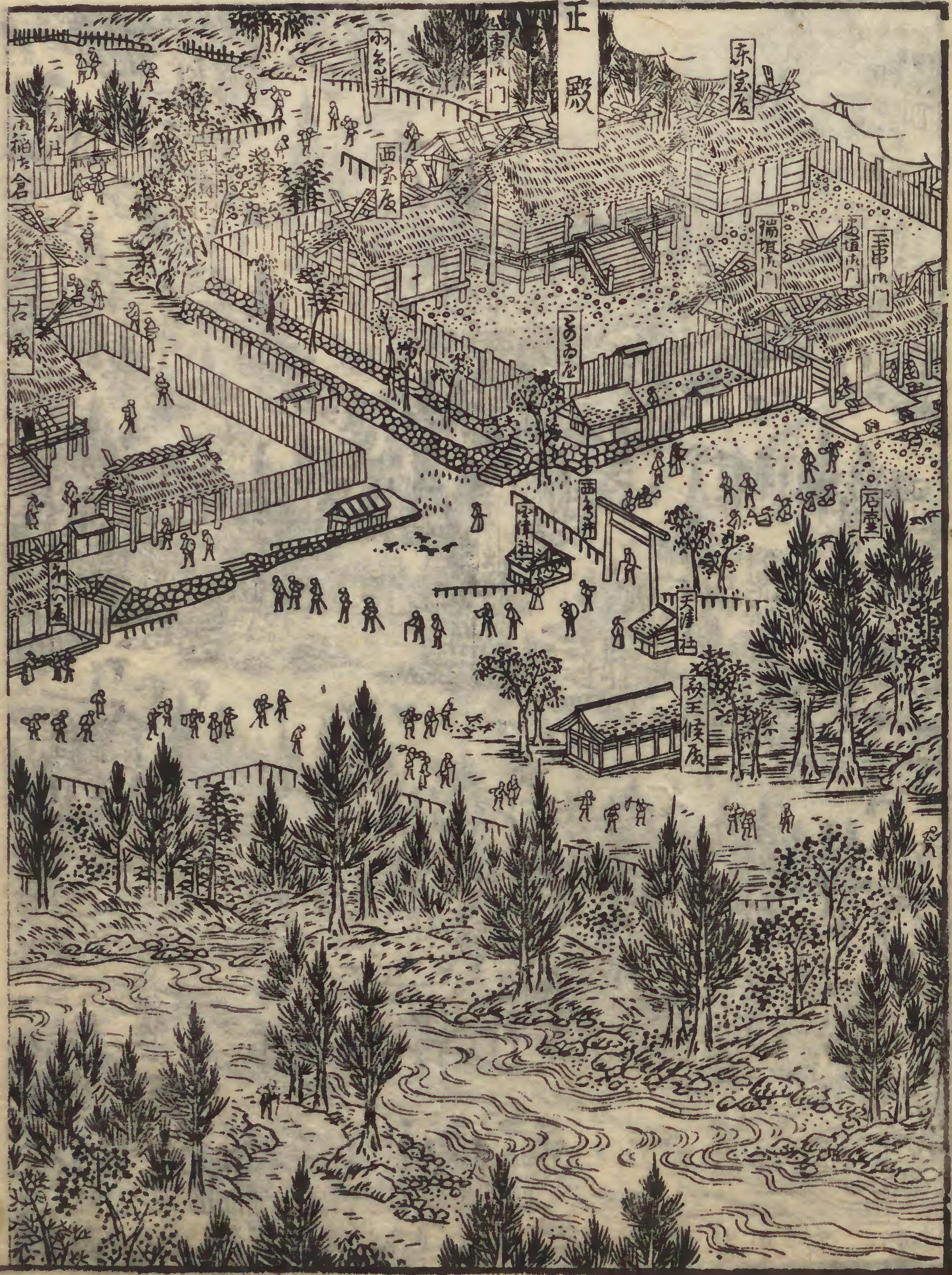
移しなぞわり 故に此所にて御橋の拝所といふ黒木の橋よりわる名なり

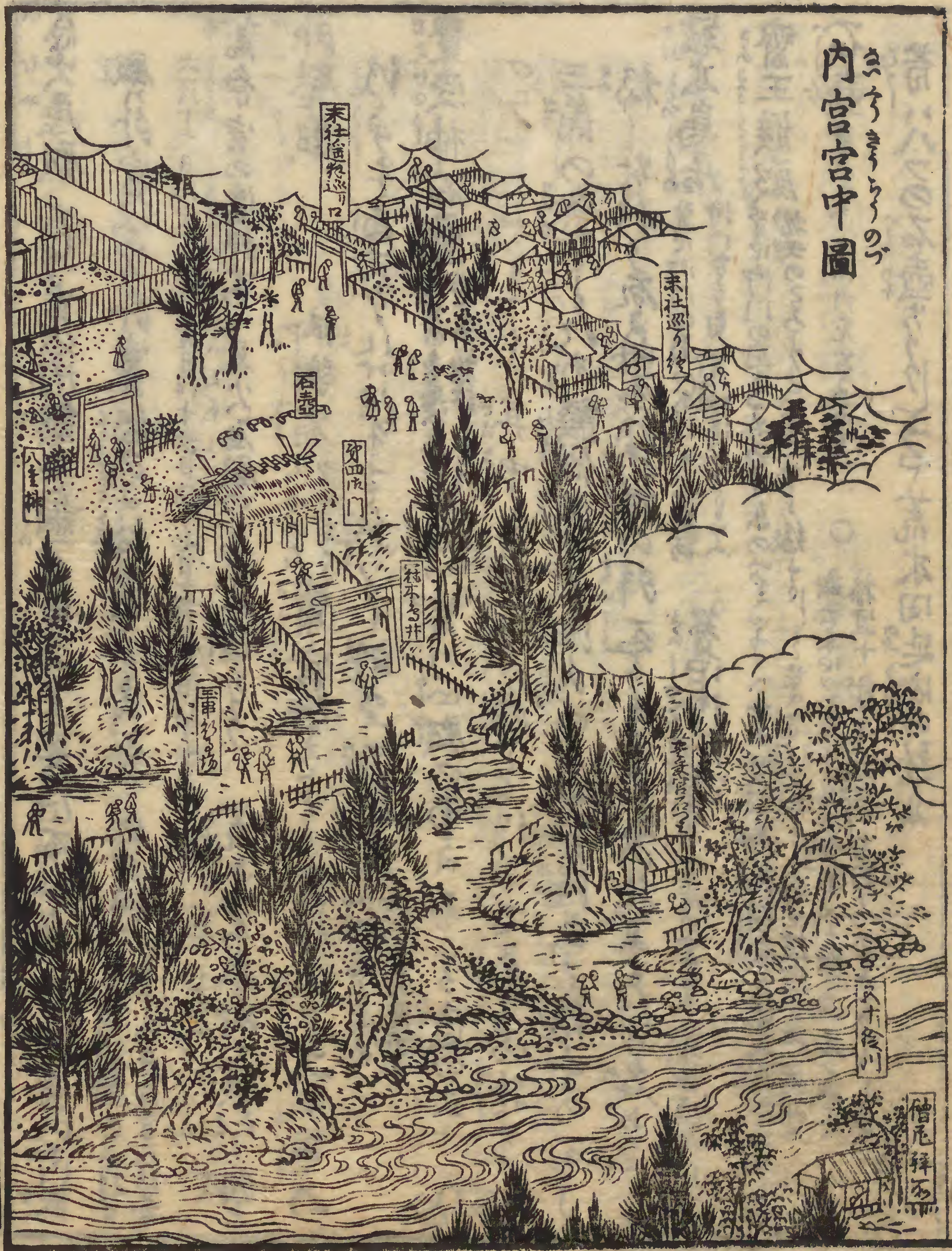
冠木鳥居 荒垣御門の南にあり 玉串御門の南荒垣御門也 第三の　荒垣御門へ

齋王候殿 荒垣御門の内鳥居の外東の方之 齋王候殿 禰宜候殿東西に並びありしが 後世のころより二字あまり綴りしを 長安延官より齋王候殿を再興

石壺 荒垣の御門の内左右にあり　○ 或云 禰宜十員 玉串 大内人の座なりしと云

昔ハ八ツの石壺なりしとや 荒木田延嗣の説に


正殿
東宝殿
西宝殿


内宮宮中圖

其二
荒祭宮
外宮并内外別宮遥拝所
新古今
神風やみもすそ川のそのかみにちぎりし事の末をたがふな
摂政太政大臣

山神社
其三
摽名をしれて和文よ
合せバ花のうつゝま縁
慚愧の次第をまるべ

榊りて八ツの石壺にたてし君ばらいの外内の宮人

第三鳥居 玉串御門の前にあり是を第三の御門ともいふ ○八重榊 第三鳥居の左右に榊と編付るを也 左玉串と名付て山向掛忌内人のさしまする祓之榊の枝数繝に赤縄欲依出来

八重さかきとハ榊を数多く並べしのたてに君ばらいのしん 荒木田 延成

玉串御門 第三の鳥居の内也 外宮に同じ ○蕃垣御門 玉串御門と瑞垣御門との間の小門にて外宮に同じ ○瑞垣御門 蕃垣御門の内也 外宮に同じ

内宮正殿

天照皇大神 一座

相殿 東 手力雄命 西 万幡豊秋津姫命 旧本作児 又ハ栲幡千々姫

日本書紀神代巻云 いにしへ天もなく地もなく人もなきときハ鶏子のごとく渾沌としてきざしを含めるがごとく其清きものは先天となり濁れるものは後に地となる其中に一ツの物を生ず状葦牙のごとし 便化して神となる是を国常立の尊と云 其余又化して土泥砂の神生じて後伊奘諾伊奘冊二柱の神生まれ イサナギとは誘の言にてナハ助語ギとハ男の義にて互ひに通ふて女之にサアミと云 男女陰陽の耦生れ給ふ 陰陽の気化をなす生まるの理とす 即二柱の神天の浮橋に立て 虚空を云 瓊矛を指下し探り給へば矛の滴瀝凝て一ツの島となれり是を磤馭盧島と云 オノコロとは自ら凝固るとの義也 これを国中の柱として 柱とは中を云 共に住み

立給ふ二柱の神の身に男たらひ女たらぬ其元の処一ツあり是をたがひに合せて始て遘合して夫婦となり 三ト八身戸なくハ巻にて夫婦交合の時の体 大八洲を生む 淡路 佐渡 大日本 今の大和国 筑紫 今の九国紙の洲 大洲 吉備の子洲等也 又対馬壱岐島及処々の小島を産む 次に海川山草木を生み 次に天下に主たるものなからんやと日の神を生給ふ號て大日孁貴と云 天照大神の御事也 此子光華明彩して六合の内照徹る二柱の神喜び給ひてこれを天に送る此時天地相去る事不遠 次に月の神を生む 月読尊 其光彩日の神に亜て在に又天に送る次に蛭子を生む 此子三歳に及べども足立ずと云 流し 海 次に素戔嗚尊を生む此子勇悍暴悪の神にて スサノヲノハ荒之也 常に哭泣を以て行とし是天地のあらゆる暴風霖旱時をうしなせ生育の花実を害するにたとふ ある時日の神の御田の畔を毀ち又新嘗きこしめす新宮に屎をけがし又神衣を織給ふ斎服殿の甍を穿ちて是を天の斑駒を剝ぎて投納給へば日の神驚き梭をもて身を傷く 是までの不わかハ衣食住の三ツを害するに比す 日の神甚慍まして天の窟に幽居給ひ六合の内常闇にして昼夜を

うさど荒魂和魂のおよ日光の發見てよたらよ此にかひく八十万の神天の安河原に集會して其請べき方便を思兼神に計て思兼とは思慮を兼るの謂なり常世の長鳴鳥に長鳴せしめ鶏之これは東方明んとを知らせん手力雄の神を磐戸の側に立せ天兒屋根命太玉命は香山の真坂樹を数百株掘しとし上の枝に多く瓊の統ぎるを懸中の枝には八咫の鏡を掛け下の枝には青幣白幣を懸又天の細女命茅纏の矛をおせ岩戸の前に俳優し兒屋根命は河内平岡又春日に祀る太玉は大和高市郡に祀瓊統幣は其もつりを敬関なり今の祝詞又は稱謂おほく結構奇麗なる地を御祓のならよかゞる○俳優のワザは態之ヲキはヲギノリの略にて神楽は鎮魂の楽なり今も神の前に楽するは猿楽の其に旨あり又賢木を以髻にし蘿を以て手繦としヒカゲは蔓なり庭燎を多くたき覆槽とて伏ろかして神明憑談をウケとは槽をうつむけにして今の拝殿をきらしてる具のおとし一書に云弓六張をならべ琴とせしなどいへり此神の前にひらうりて人の物つひ糸をとりてかはらくは其槽とうつ人に神の混じたるとは摂ひのすなはち今も俗に神のみこをとる又は岩戸の前にまをするを請うてまうす此に於て天照大神磐戸を細く開きて穴視はせ給ふを手力雄其御手を奉て引出しまをらせ中臣の神たち端出縄を曳て復びな入ませそと申し留めまゐらせたりとかや素戔嗚尊の髪を拔き爪を拔く罪を贖ひかの根の國へぞ逐やりける

根の國とは地下の國にて極て遠くあるらんといふ○素戔嗚尊より簸川上にて手摩乳脚摩乳の女稲田姫を娶り八岐大蛇を退治して草薙の剣をえつゝ出雲に宮造して大社是なり

○按天神地神の年数を書に記し神代より天神九代かけて八千年の尊までいつゞきも百億万歳二柱の神は二万三千年十歳天照大神は二十五万歳之より天忍穂耳尊までも此御年数三十万歳瓊々杵尊は三十一万歳火々出見尊は六十三万七千八百九十二歳鵜草葺不合尊は八十三万六千四十二歳是より人皇の初祖神武天皇の御齢は大よ劣らせたまひて僅に百二十七歳

武之此百億万歳の数くをかぞへてはまことに濫の其妙を篤くおもひとしきとは云ひがたし是を外の利をみれて云へんところなるきみしもあらば試みにいづく人皇十二代景行天皇筑後國の行宮に至りて修く樹に倒ろる樹あり其長さ九百七十丈余優れたりと云ふ朝日の影は肥前國の藤津郡多良山の上を覆へりと云ふ天皇元霊木とて此國を御木國と名付夕日の影は肥後國の阿蘇の山を覆へりと云ふ天皇元霊木とて此國を御木國と号給ひ其國人に問ふに其根は今の不朽優生なるを知るにて今の尚海中にも入て其島の上を恵まして其の高さ僅十二代の時ぶふ朽優ちるまだき其樹の芽ぐみて以来百千年の星霜を経しぞ勘者ならば是を測て以て此数百億万歳の実有ぬかも知るべし大如此大樹の神の生へるも其数は其類るまじうしもあるべし近江の栗太郡の栢木の如きも其類なり

武云天照大神は太陽日の神を祭る所に疑ふべくもあらざれば天照神を神武天皇皇統連綿の鼻祖とせば所謂日本大祖の宗廟と

瑞珠盟約

天照大神の弟素盞烏尊ハ生質勇悍にして甚不為之タルが宇宙に君として除らざれバとて二神の勅によりて根の國へ逐やり給ふ尊至と御ひ高天原の姉の君に見へて緩永く退くべしと雲霧を蹴立てて天に詣り給ひて互に盟ひをなし大神ハ尊の剱を咀嚼て田心姫湍津姫市杵姫の三女を生じ給ふ尊ハ大神の御統の瓊をとりて正哉吾勝天穂日天津彦根活津彦熊野櫲樟日の五男を生じたまふ

是天地の気化によりて人の生ずるの始なり

崇め奉り又両宮を天神地祇とし則天地の父母と合せ祀奉るに似よう
又云凡て神代の事は日本紀神代巻をもつて證とするより外なし然る
に事々物々に諸説紛々として人々の意をもつて解する故信ぜざる
に至らば各すこし百億万歳の昔を論ずるたとへば臆説て是を語
に等し強て意を張て解を奪ひは笑ふに堪へず 西行の歌とて
何ごとのおはしますかはしらねどもかたじけなさに涙こぼるゝ
又ばせをの句に 何の木の花ともしらず匂ひかな 神
此意にめでて今も尚此に詣ずる遠津国の人の心を向ふに実に何ごとのおは
しますともしらねども千里の海山を経て来るといへども信ありて実に捧
にもあらず唯一向に雛みたこのことし蒼なる此をもつて思ふに親の子を恵
ひまた孝子の親に仕ふるも雲中の争をすてもろ心のみは千里の遠
くさるとうるもいづれ遠しとせんや只人間の実心は必感ずると待て
知られざるものにあらざ不謂性善則神明のちかひを重んじ尊ごさする理と
すべて推べかりけり
○手力雄 此神は岩戸引開き給ひし強力の神なり又或説に曰タヂカラーとは回祖の前之秋実を帝へ貢
もろ/\とチカラとなるの○末社の内懸税の神社といふは詳らかならず
○栲幡千々姫 は神代巻下云天照大神の御子天忍穂耳尊の御妻にして高皇産霊尊の女也 或説云栲は白布にして割て糸に制する故其糸をもつて織に繊の前をなしたし千々は秋津とくるの用ゆべき大事を使ふ義を以て是をなす故に万幡豊秋津姫とも云されば相殿の三神は田祖又衣服の祖と崇めて祭る神なりといふとかたんぬ
○御鎮座の事 日本紀一書云 日の神岩戸を開て出ます時鏡をもて其石窟に投入しかば戸に触て小瑕付て今に尚存す此即伊勢に崇秘る大神也云々 尚
神武天皇以来代々此御鏡同殿にましませしが人皇十代崇神天皇の
御宇神威畏れ給ひて天の香山の荒金をもて鏡剣を鋳さしめて温明殿に
あがめて内侍所宝剣と名付内裏にとゞめ神代よりの鏡剣は崇神天皇六
年己丑秋九月に御女豊鍬入姫を附まゐらせて大和国笠縫の邑に付て磯城の神
籬を立て以て斎き奉る其後大神の教ゆるによりて豊鍬入姫大神を戴き奉り
国々によき宮所を求め給ふに年老給ひしによりて人皇十一代垂仁天皇

御女大倭姫命是よりかゝりて美和の御諸の宮より諸国順覧ある遷幸乃次第見え
つゞいて日本紀に見えたり 終に同御宇二十六年丁巳十月甲子宇治郷五十鈴川の邊りに
移し奉り相殿には天児屋根命太玉命をまつり其後外宮御鎮
座の時此二神を外宮の西相殿に定め給ふ ○正殿を東の宮又五十鈴の宮
磯の宮ともいふ 朝日の宮とも申奉る一説磯の宮は斎宮の事也

玉葉
神風や朝日の宮の宮うつしかげのどかなる世にこそありけれ　鎌倉右大臣

神の代のまゝや巽のうら山都の空も今朝霞むらん　度会元長

幾秋を契りむかへて神路山月も天照ひかりなるらん　荒木田氏忠

宮柱立そふとしひの秋乃月に幾度かめぐりあふぞれ　荒木田延季

拾遺愚草
さやかなる月日のかけにかけてても天照神にたのむなりけり
君が代や天照神のちかひあればひかりさしそふ秋の夜乃月
久かたの天照神のゆふかつらかけて幾世をこひわたるらん　定家

神路山 宮域のめぐり東 一名大山 天照山 宇治山 鷲日山ともいふ
鷲日山とは天竺霊鷲山に比しける名なれば、よりどころあるべき名にはあらで西行
の歌よりいひそめしたるなるべし 歌詠んで呼ぶ名にもあらじ

千載集 円位法師
高野の山を住うかれて後伊勢国二見の浦の山寺に侍りけるに太神宮の御山をば神路山と申 大日如来の御垂跡を思ひてよみ侍りける
ふかく入て神路のおくを尋ればまた上もなき峰の松風

[illegible] 後鳥羽院御製
かくしはてそむかんまでもまもれよ天照山の秋の夜乃月

百枝松 内宮御神木にて神路山に立りといひ伝へども其所詳ならず
西行上人の[illegible]もとそ川の[illegible]合祭して[illegible]
岩波もこゝもとそ川の末なれやきよく流れて松の百枝に　俊成

東宝殿 ○西宝殿 正殿の東西にあり 子細外宮に同し ○宿衛殿 本宮の傍にあり昔は尼宮守し宿衛所といひ宿直をおかるなるを番宿のごとく宿直をおかれしなり

八十末社 本社の御前より東へ向へる宮にて外宮の如く 拝所 其次第本社の左右にことごとく下にしるす

○一 村澤神社 不知祭神 伊勢津彦命 武外 本社飯野郡村沢村にあり ○二 多伎原神社 不知祭神 真名子神 本社多気郡三瀬村にあり

○三 擽大刀自神社 不知祭神 擽大刀自命 本社同郡熊社三座の内也 ○四 櫛田神社 郡 不知祭神 大若子命 本社飯野郡櫛田村にあり

○五 大山祇神社 不知祭神 大山祇命 本社宮山の内にあり ○六 川原神社 不知祭神 月讀荒魂 本社同郡佐八村にあり ○七 佐賀津知神社 不知祭神 大山祇命 本社宮山の内にあり

石窟幽居（せつくつゆうきよ）

○八久具都神社不知祭久々都姫命本社当郡久々村○九大神御薮川神社不知祭大神御薮川神本社当郡城田郷薮川神社内なり
○十久々都彦神社一不知祭久具都彦命上の久々神社内にあり○十一伊加利比女神社不知祭伊加利比女命本社月読宮南葦原社三社の内也○十二宇治乃奴鬼神社不知祭水上命社地未詳○十三御裳濯比売神社一不知祭倭姫命上ミ云那自貴神社内にあり○十四湯田神社不知祭雷電神同郡湯田村にあり○十五宮比神社不知祭大神宮比地辺神本宮荒垣内乾の角にあり○十六朝熊水神社不知祭朝熊水神小朝熊社三座の内なり○十七寒川姫神社不知祭大水上児寒川姫命本社多気郡牟弥神社内にあり○十八荒前姫神社一不知祭嫁々神志広国安楽湾湊にあり○十九大神御滄川神社不知祭大神御滄川神当郡城田御田辺神社内にあり○二十石井神社不知祭高水命岩井田山上にあり○廿一八束穂神社一不知祭稲魂命社地未詳神名不知○廿二堅田神社不知祭神名未詳本社当郡三津村にあり○廿三眞名子神社不知祭真名子神多気郡多伎原神社内にあり○廿四葦立弖神社不知祭玉移良比女命本社在不知不分明或云牛谷西作倉と云不知小社なり葦立弖神社と称未詳○廿五若出神社一不知祭若出神小朝熊社三坐の内○廿六大歳神社不知祭大歳神社当郡磯辺村にあり○廿七毛受女神社不知祭未詳社地不分明或云今ノ左家東馬淵下東岸にあり毛須社是なり○廿八宇加御魂神社不知祭倉稲魂神葦原社三坐の内なり○廿九大歳御祖神社不知祭素盞嗚命湯田神社の内にあり○三十大神御船神社不知祭大島船神多気郡有尓郷土羽村にあり○卅一千依媛神社不知祭千依比女命大歳神児当郡田辺御原村にあり摂羅社之○卅二棒原神社不知祭天須麻留女命当郡田辺御田邊村にあり○卅四栖長姫神社不知祭大水上ノ児栖長姫命社地当郡宇治郷畑村にあり○卅五阿波羡石神社不知祭粟御子道主命須佐ノ乎ノ命ノ御子○卅六宇治山田神社不知祭山田姫命当郡中村にあり○卅七櫛玉神社不知祭櫛玉命社地未詳○卅八矢野波々木神社不知祭大神御滄地神本社本宮荒垣外巽角にあり○卅九大與度神社不知祭未詳倭姫命御言之不定本社多気郡大淀村本社にあり○四十園相神社不知祭大水上ノ児曽奈比々古ノ命本社同郡沼木郷積良にあり○四十一大国玉比女神社不知祭大国玉姫命本社社地未詳○四十二鴨神社不知祭石己呂別命大水上ノ子社地同郡城田郷山上村にあり○四十三江神社不知祭長口女命大歳御祖命宇加ノ御玉命本社社地同郡二見郷江村にあり○四十四牟弥神社不知祭宇川比古命宇川比女命本社多気郡有尓郷有尓神社牟弥相連る○四十五佐見津姫神社一不知祭未詳社地未詳○四十六高天原神社不知祭未詳社地未詳○四十七子守神社不知祭粟島神御玉本社当郡伊気浦松下村にあり○四十八久麻良比神社不知祭千依姫命本社田辺郷原村にあり延喜式帳にみゆ○四十九緒呂曽神社不知祭高水上命本社同郡湯田郷○五十葭原神社不知祭佐々津彦命大歳児又宇加屋社も宮南葭原社三坐内にあり或社地奥佐田村山中にありと云小社村にあり○五十一鴨下神社不知祭石己呂別命鴨比女命大水上ノ内にあり上にみえたり○五十二粟海神社不知祭稲依比女ノ命社地同郡粟海村にあり○五十三長口女神社不知祭長口女命本社江神社三坐内にあり上にみえたり○五十四懸税御魂神社不知祭未詳社地不知○五十五大山祇御祖神社不知祭大山祇御祖神大水社同郡畑村にあり○五十六津布良神社不知祭津布良彦命津布良姫命ノ児本社同郡城田郷津布良村にあり○五十七那自賣神社不知祭大水上御祖ノ命御裳濯姫命園田御裳濯川岸にあり

上ミ日ん也今云山神○五十八魚見神社不知祭神月夜見ノ命荒玉姫本社同郡魚見村ニ在○五十九村田比女神社

不知祭神村田比女命本社国津御祖ノ社ノ内ニ在り○六十川合神社不知祭神細川水命本社川相渕辺ニ宇治今ニ在○六十一伊佐奈瀰神社不知祭神伊弉冊命本社中村西ニ在長寛勘注文ニ無社地ト云云中村ヨリ大ハ非社○六十二国津御祖神社不知祭神宇治比女命国生神児又田村比咩命二坐大土御祖ノ社社地良方或云同郡楠部村ニ在○六十三坂手国生神社不知祭神高水上命本社同郡田辺郷田辺村ニ在○六十四新川神社不知祭神新川比女命大水児社地未詳川合社ノ辺ニ在○六十五大土御祖神社不知祭神大国玉命水佐々良比古命佐々良比女命本社同郡楠部村ニ在○六十六佐々牟江神社不知祭神未詳本社同郡大淀村ニあり○六十七荒前神社不知祭神荒前比咩命本社社地未詳或云同郡松下村ニ在○六十八速川比古神社不知祭神須麻留女神児本社佐田国生社三坐ノ内多気郡田丸村東ニ在○六十九狭田国生神社不知祭神速川比古速川比女命多気郡佐田村ニ在

已上六十九社本宮の東南の角にある俗に奥のみやといふ

天津神社○国津神社是天神地祇を祭る所鳥居の左右にあり

興玉拝所石壇西面本宮の艮の角にあり興玉神とハ猿田彦大神をまつるなり

西鳥居是を荒垣西御門とも云玉垣御門の西にあり

本宮古殿廿ケ年ニ一度遷宮此の古殿と云

御稲御倉奥へ玉垣不の向にあり御稲を納る倉也旧ハ内宮にあり今ハ一宮殿も建て是を俗に御機殿と称すれども御政印も此に納む機殿とふハあやまりなり云々毎年中御子日九月十一日神

みそ十日の夕に御稲の御倉に納むとく織姫機を織るをおり斎番の御丁毎に釣水を汲で機殿へ送るなりとある此不の是につぐの事にや

一元社御稲倉の傍にありこれも遥拝所なり本社は楠部村にあり国津神社の別名なりともいへり

裏御門○北鳥居荒垣の北の御門とも云○小玉垣御門

○北端垣御門此御門より荒祭の宮へ至る間東の山中に一ツの井あり当宮には是を掬ふ是れ御政印を押する時用ゆる水なりとぞ

荒祭宮本宮の北の坂の上にあり第一の別宮也不知祭瀬織津姫命一云天疎向津媛命ともいふなり則此宮の荒魂と祭るといふ日本紀を高宮共云別宮は皆萱葺にてかつを木鰹木御門御垣あり

荒祭宮の前東西の遥拝所先正面は外宮を拝し又西北の隅に向て月読宮伊弉諾宮瀧原並宮を拝し中を次に東南の隅を拝す中をば伊雑宮を次に又西北隅を拝して高宮土宮新月読風宮高神客神小御門社外宮摂社末社○次に又東北の隅に向ひて拝す中をば小朝熊社等社云○月読ハ当三の別宮宇治中村にあり本宮より十八町○伊弉諾ハ月読の西の方に並云伊弉諾伊弉冊御旧殿にいます也○瀧原ハ当国の別宮不知祭速秋売命なり並の宮ハ瀬速秋津姫命之宮川の上ツ瀬尾村にあり伊勢志摩の国堺にて内宮より十里余なり伊雑の宮ハ志摩の国之

新後拾遺
後九条前内大臣
世々かはらず
たてし
内外の宮柱
たえぬ
神路の
山ふもとに
此図は其時を見
留めしにはあらず
して古人の図を
模せり然るに杜撰
図記もしくみあらば
それ戯作者の教示に
つらて是を改む尚
後日の改刻に
見らるべし

御遷宮

御池 巡り凡百八十間あり遥拝所の ○河島神社拝所 瀧原附属の社也此社の祭神詳ならず

櫻宮 大河の左の方石壇あり 不祭木花開耶姫命之 櫻御前ともいふ 小朝熊の内櫻大刀自神なり 神座なく只櫻の一本を神体として崇む
則小朝熊に坐を神此に移せ遥拝を

読人不知
神風に心やすくぞまかせつる櫻の宮の花のさかりは　西行

○河原神社 祭神沢御津姫命本社于尻村にあり 瀧原宮附属の神之神号未詳 櫻の宮の辺にあり

由貴殿 一殿の後にあり ○酒殿 神酒を造る酒屋なり 此二字共酒殿の院内之此酒殿にハ天逆太刀天の逆鉾を納む深秘の旨ありとぞ又三条の器疫毎に献ずる 三条ハ六月へ九月へ十二月の神事なり
御饌に用ゆる物皆収むる院之由貴とハ斎清むるの名之

朝廷遥拝所 由貴殿の傍櫻宮の西の石壇之 帝を拝し奉る所なり

子良館 二の鳥居に入て右の方 風の宮橋の前にあり 子良物忌子の宿館之

附言
慶長十二年国母より内宮子良の館に貝おほひ桶一具を賜るよしのいひ今に彼館に残れり
其貝桶の蓋のうちに双方に紙ありて其歌云
神風やいすゞ川のながれのうちに子良のかしこき者あり朝夕の神つかへの外のいとまに
其をもなぐさむべきものなりとてかのあそびものをよそしてかつけたまふも国母仙院よりの貝
桶をくだし給ふ彼大中臣輔弘がまうしうけたるかのいにしへもありしことなどおもひ出て
このふみうやしくおもしろくせらるゝまた右にみえたるうたの名の二つをこの桶にようめ
あけのみやわかせたまうけ給うりこれよりさきをつたへ付りふかきん
かつしのふるさとハ
玉くしげふたゝみ浦の貝あはせにも心あるまつのむすびを
良恕親王應下勅書

右の例に依て明和の比も浮役管揚ひしものも今の子良殿にありとぞ

五十鈴川橋 長さ卅七間 俗にいふ宮の橋とふ 左のかたに小原橋あり 僧尼の拝所へ至る所あり
橋の前後に鳥居あり 擬宝珠ハ造営毎に新に制を改るに東西の扉ならば段むさるを これは明應七年の年号あり

僧尼拝所 五十鈴川を隔て本宮の向ふにあり

風宮 五十鈴川橋を渡りて右の方にあり 内人太を牽ひて風雨早災の停止を祈る 内宮第七の別宮之細既にいへり 風日祈の宮といひ六月より七月へ至るまで祢宜

末社 風の宮の東南に十一社あり 上六十九社に合して八十末社といふ

氏神社 祭神天見通命荒木田氏 本社田辺郷岩井田山にあり ○久母宇津神社 祭神大水上児多岐大刀自神或云熊淵神社本社御裳濯川上雲津谷にあり ○山神社 祭神大山祇命本社宮山の内にあり ○国見神社 祭神彦国見加岐建与束命本社門郡山田原邑にあり ○石登宇神社 祭神未詳神号未詳 ○或称川神社と称す本社神路山の上にあり ○鏡石神社 祭神未詳 ○山宮神社 祭神天見通命本社津布良谷及中村東小谷に在て遥拝の所なり ○矢野神社 祭神稚日女命本社門郡矢野村にあり ○天神社 祭神未詳本社門郡中村にあり 熊淵神社 祭神多岐大刀自命本社門郡熊淵辺にあり ○御伴神社 神社地もまた未詳

已上十一社

御贄小屋（おんべこや）

八百會遙拜所 子良の館の西の方九の石つゝき 八百万神を拝し奉る

瀧祭宮 第一の別宮也 子良館南の道の末左の方の石つゝきをいふ 瀧祭沢女神又ハ弥都波能売神也

ていふへより神殿はなく石壇のみ也 水の神を崇む 二瀧の宮の本社ハ五十鈴川西の岸九山のもとに岩の鎮坐

あり下に瀧ありこれを瀧祭のふもとの世辺を以百年とて守其神を神位記に曰瀧祭ハ

荒祭宮に並びて崇敬の別宮にて神位も荒祭宮につゞけり然とも御宮なき故別宮に入

不入もあり 瀧原並宮ハ一所に入ぬまでも是を第六に加ふるなり

瀧宮並宮 瀧原の宮に並び座す

夫木

浪とみれ花の志ら川その岩枕瀧の宮ゐやまよりもしらん　西行

仝

瀧の原ならひの宮の神さひ経来たらく沖津白浪　為家

河原祓所 風の宮の橋より瀧祭との間にて 参詣記云 瀧祭の神とて河の洲崎に松枝なんどの一むら立る所にて御社もましまさず神は水底に御座とかや云々 ○宮のまへの神宝殿かしこ入出しまつりて御祓ありて 新造殿へ入まゐらする河原御祓と号く帝王御即位の式と云々 ○参詣記云 五十鈴川と御裳濯川の落合する所に松の木ありて御祓所とす

落合川原 瀧祭の前の河原なり

続門葉集 伊勢の神路山の月影の本をまよかくま下くとまさ　そ川のへしの落あひの

川原ちりかけ月そ見れば

月はまや神路の山よ出ぬらし御河の水にかげそとどしき　前大僧正　通海

河合社 瀧宮石壇の南 河合に石つゝきあり 祭る細川水神 儀式帳名社十二所の内にて御遷宮乃時申出を清め奉る所也 右是までの所に参詣をる人ハ是より一の鳥居に出て禰宜の手より御祓を渡る也 宮鍍の横るより御厩にまゐる又風の宮のまへしを渡る也

御厩 後町 子良へ出る人ハ子良の鍍の山の上方に在り 厩にいてる也 古ハ内外の御厩二所にありしとかや 神馬ハ今ハ絶たる也 古庭より進らせら

れを代中絶して今ハ尾張家よりと又桂家よりと交代に進らせらるゝ也

高倉殿 古石壇にあり 御馬飼内人とて並及の職掌あり中古より絶て今ハ御丁井ひき御馬飼内人再興ありとぞて

御厩の後 御遷宮の時古ハ御船代御神宝などの物換しるを収め奉ら

三し御倉の跡なり

山神社 宇治橋の東山の麓にあり 祭神大山祇命此所を石井田とゆへる居数多並べり又傍に子安の神社あり 木花開耶姫を祭る此辺俗家飴を販く美味名産之

石井神社 石井田にあり これを巌の社ともいふ儀式帳名社十又不の内之

荒木田氏社 此所にあり旧名 近年田辺旧跡に社をまつりて此傍に宇武社あり　東神末社の[illegible]

荒木田の祖神ハ天見通命を祭るといふ氏神の鎮る　氏は宇武霊神を此宮居にとどめしとかや

○宇武神主ハ大永天文の比内宮の長官荒木田氏にして歌人にならびて連歌

の式をえらむ独吟のみなる世中百首の狂哥あり又雑書の自筆紙残り

神路山我しつかなる杉のまつの嵐し

鶏鳴よりも見ゆらん我世かな

元日や神代のことも思はるゝ

天文十八年八月九日

一禰宜 守武

△内宮末社諸縁起を見るに南伊雑宮より鶏鳴の頃をひろ二見より川端辺の七社の次第記を他にして小社の月より西行法師菩提山有のこゝろすり

御贄小屋 御宮山の東の瑞籬の下にあり 磯辺の漁父より捧る魚類の神饌を此に納む

一の瀬 これは内宮より磯辺村へゆく道 磯辺村とあまこの川を渡る所を一の瀬といふなり 川に亀石あり

三方石 抜坂よりおし来りあり左の川なり凡一丈四尺方もみえたる石の真中に一株の松生ひつり友に三方に准ふ

抜坂 内宮より是まで一里これより三尺町ばかり左の谷川上に彦が瀬といふあり 瀬つゞき甚涼し其瀬壺の両方へ石突出て其石の下空にして人家の様のおもしろきよ又甚だ見にくき石あり のぼりてみる ○長尾彦瀬 右の方の中に此石五六尺方ある二つの石あり人これをおりき穴うちとそるよ此なり ○俎石 抜坂よりおし 川よりあり 岩より川中へ出たる三尺余又六尺の石あり 御人此上にて酒肴をひらき庖丁なとせし故に名付し也 ○鮎留石 俎石の次にあり此岩の一面ぐるりよろしく流るひく名なれば鮎よく名ばく ○獅子鼻石 むのつゞきの岸にあり形ちに似たり

瀧祭窟

宇治山田ゟそれ
是を風穴といふ

合坂　坂坂より又十町許に地蔵堂ありて是勢州志州の境也　此下猿田彦社　去坂合に出合し左合坂といふ

猿田彦森　合坂より下り坂の中に　此森の松のみ行枝に生へり左のかたに鳥居あり是より谷へ二町斗下りて岩窟あり

瀧祭窟　合坂よりかゝり中程の右の方にあり

其穴に入る事凡十間ばかりにして瀧みの瀧祭窟と標石を立てり

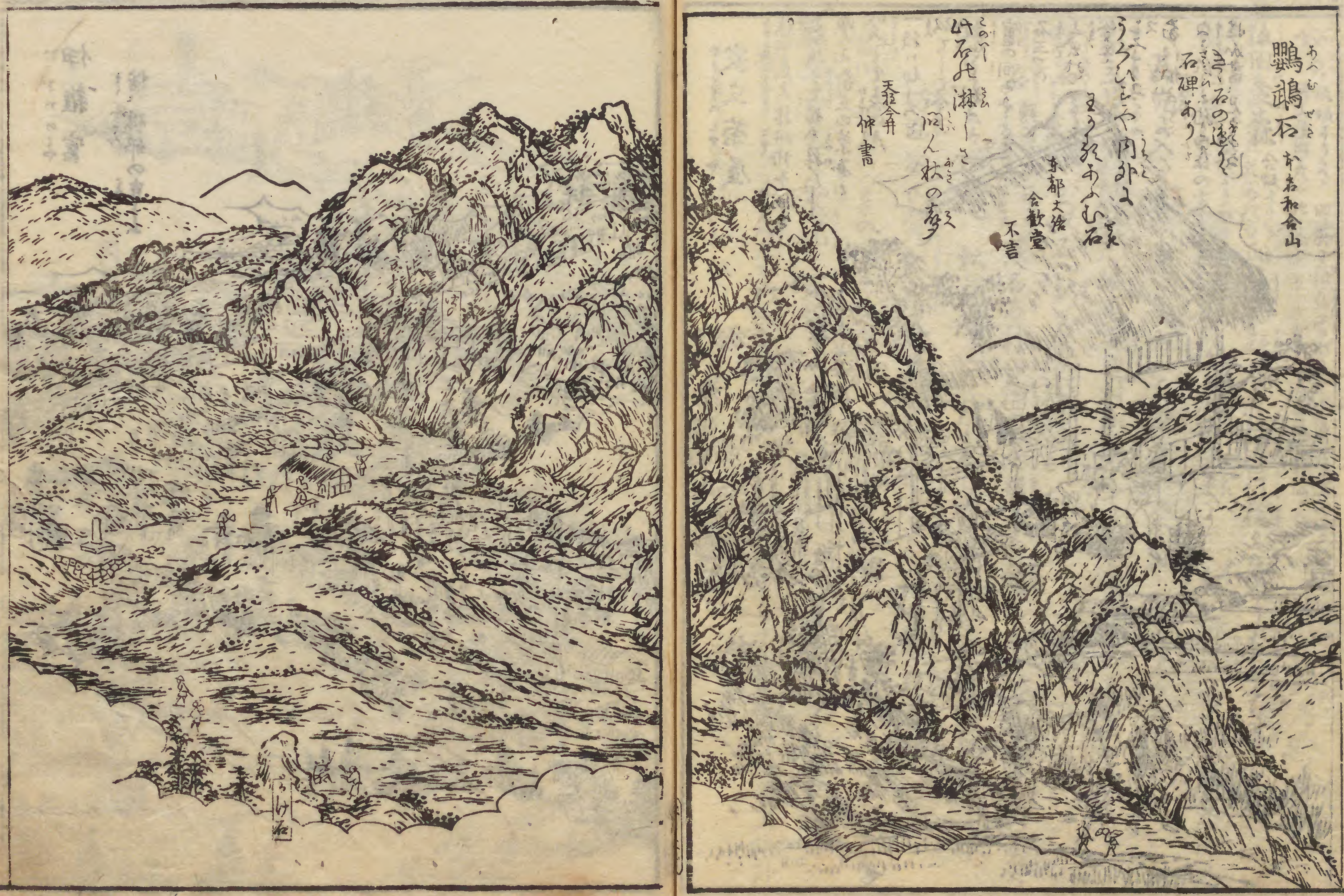
家立茶屋　合坂より下り坂道にあり　此所磯辺村御師より来宮人を出迎ふる所なり

甑石　家立より十余町にあり　此石へ行人の石なり

鼎石　甑石より二町斗下る谷にあり　鼎石と標石を建る石の離れありて是より宮の方へ着す
移ひしと云る俗説也
　私曰中華に石鼎と云て山人の器用とせる龍頸の腹詩有
巧匠斲山骨刳中事煎烹直柄未當權塞口自呑聲　下略

宮川　此名いづれの谷よりいひならはせるやしらず

鷦鷯石　是を和合山と云　街道より三町　高サ十七間　横七十間　物の音に答へる石の故にかく名づく
むかし其声を発る石あり是を答石と云声を発するを聞けば石とて又此外
みそぎより岩鏡かけ松などもあり尚図上に出せり


鸚鵡石 在名和合山
此石の邊に石碑あり
うぐひすや内外よまう聲あふむ石
東都大路 合歡堂 不言
此石や淋しさ問ん秋の夢
天龍今井 仲書

伊雑宮
俗に礒部の宮と云
大楠
本宮

猿田彦太神社
大歳宮
飯井高宮
穂落宮
大歳宮

其二
神祇百首
秋の田乃穂落しれ
神ゐすゝへを
知り人ゝ久しき
鶴の万代
度會之長
千田

倭姫命
視咲穂鶴

恵利原 ○本郷村 恵利原村九町あり 又上之村ともいふ此所より朝熊岳へのぼる道あり

伊雑宮 伊雑村にあり俗に磯辺村といふ内宮別宮の其一なり内宮より三里 祭神伊佐波登美命玉柱屋姫命二座也

倭姫世紀に曰垂仁天皇の御宇伊雑の方葦原の中に稲の生たる所ありて真名鶴の鳴声止ずして日夜鳴き倭姫命人を遣して見せしめ給ふに鶴の稲穂を咥へて鳴けり其所を倭姫命是を見給ひて大歳神に奉らんと其稲を抜穂に抜て皇大神の御饌に奉り其穂を伊佐波登美の神に仰て抜穂を田と名つけて其所に伊佐波登美の神の宮を造りて斎き奉り又其鶴の住しをば大歳神と号け奉りし即此伊雑の宮是なりといへり

大歳宮 或は磯辺の高宮ともいふ又穂落の宮ともいふ祭神真名鶴なり稲を咥へて落せし故穂落といふよし 穂落大歳訓 額に大歳宮 飯井高宮 穂落宮とあり

○飯井高社 祭神稚田彦命外数多末社あり○穂落の池は稲を落せし所なり

○御田宮は東にあり又月上旬吉日を撰みて田植祝あり 此磯辺の宮中の名物なりしとぞおほきに人もあつまるといへり

内宮別宮の内なれば参詣あるべき所なり

▲是より朝熊岳の道を記す 宇治橋山神の社の左より登りて凡六十町あり

鵜倉峠 宇治より十六町 茶店あり此所より左へ下れば二見浦楠部村へ出る 一宇田峠 楠部村より十六町

○笹原峠 茶屋あり ○弘法茶屋 清泉あり甚冷なり洞あり ○天狗岩 笹原の小の谷にあり形天狗に似たり

朝熊山嶽 内宮より五十町一宇田峠より廿町余 茶屋多し二十余町下れば朝熊村なり

此嶽は一山の最高頂にして伊勢志摩の境なり金剛證寺を伊勢の地なり朝熊山の麓の朝熊村より及びたる名なり此一山西南は神路山につゞき東北は大海とのぞみて東に富士の高根見ゆ又甲斐の白根信濃の山嶽又美濃尾張の遠峯又加賀の白山など見えて類なき佳境也

○岩舟辨財天 堂の右の方にあり竪七尺横二尺余厚サ二尺の石なり

○万金丹 此間茶屋ごとに売る此薬の祖は尾張の国内海より出しこれは又秋田城之介實季秘方を伝へしとぞ先が丸山又智磯辺へ移る又又舟津より此所へ出る店あり

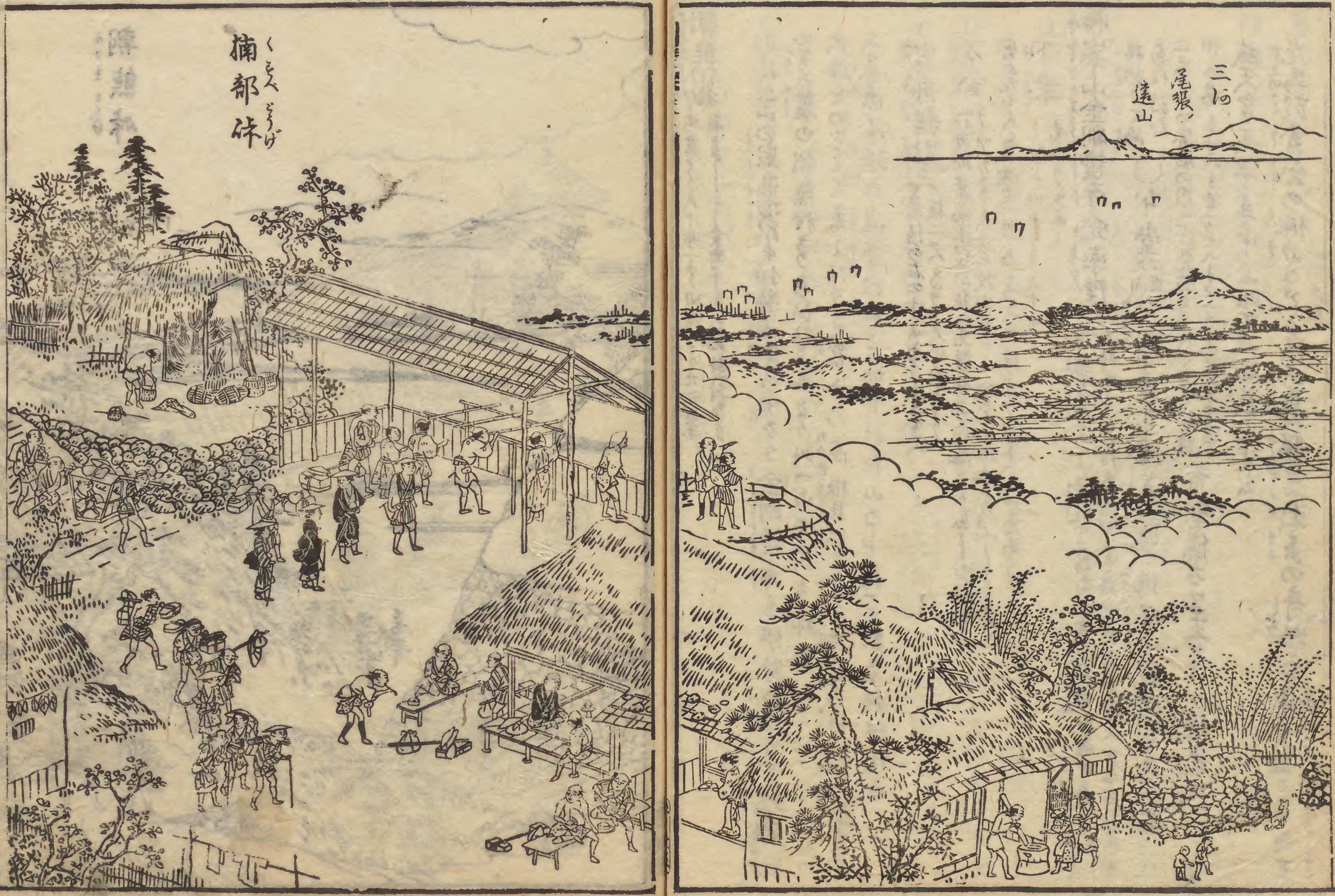
○下乗 是より内宮より六十町

勝峯山金剛證寺兜率院 禅密兼学にて塔頭十二坊あり開山暁台和尚中興は弘法大師なり其後衰微せしを鎌倉建長寺東岳和尚再興して禅となりこの後は臨済宗に改む

○本堂 九間四面 本尊虚空蔵菩薩○佛牙舎利塔 本堂の前にあり聖徳太子天竺より伝来せしと云ふ 三尺四方の宝殿の内に七寸四方高サ一尺一寸の宝塔あり中の長サ一寸八分厚サ七八分四方の舎利を安置す

武天皇天平年中此所へ安置すといふ

左馬頭義朝の佩刀○ことに名の甚だ贈名教多の寄物あり 義朝の佩刀は世間茶屋より寄来るよし



捕部峠
三河
尾張
遠山

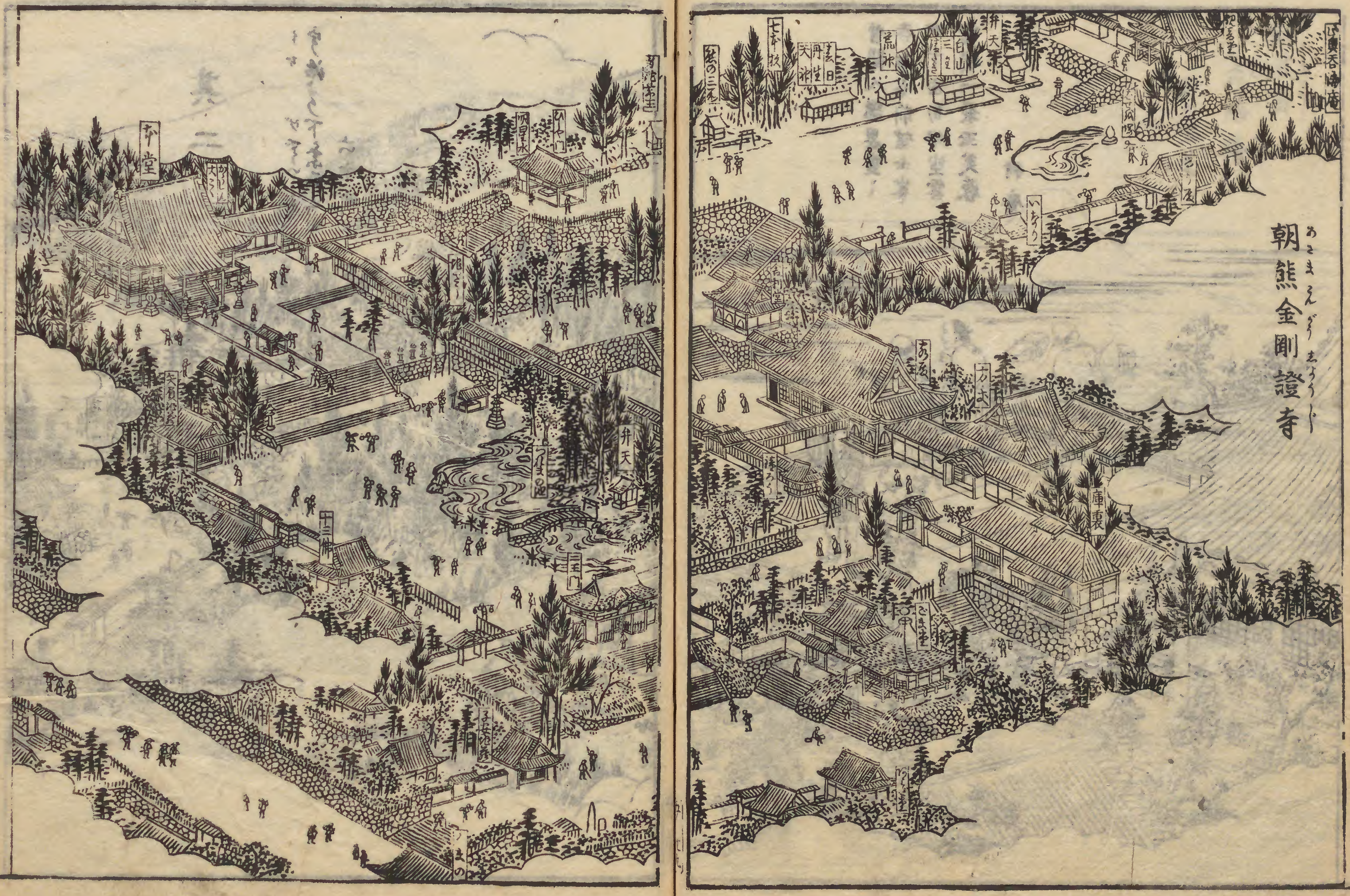
朝熊峠（あさまとうげ）

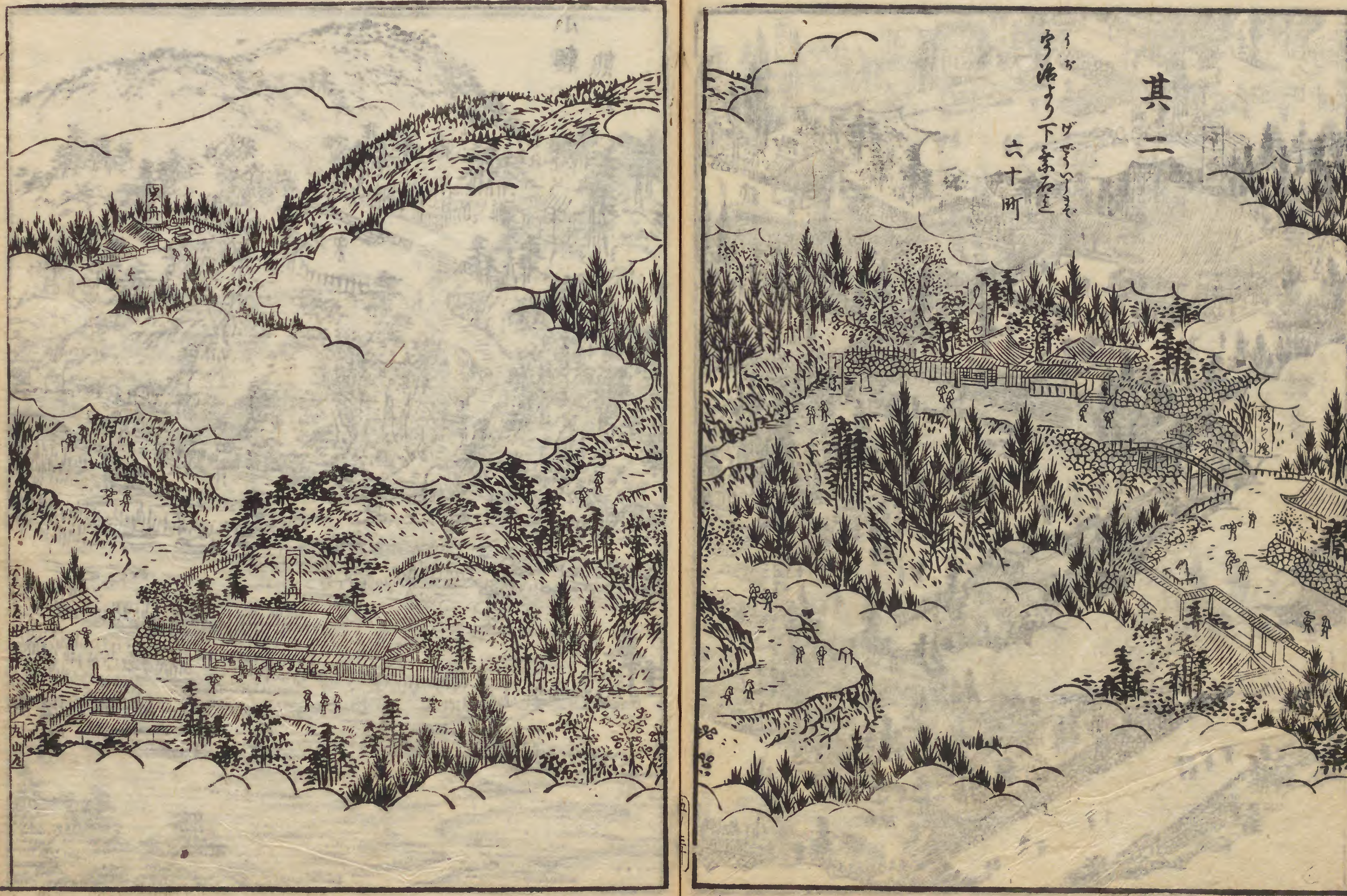
蘚の碁盤は秋田城之介泰衡の墓にて其ほとりに西湖を画きて其制巧なり但し草蘚の碁盤と
云ふ者はやぶれて無しさて碁石の盤なりしを後ところの碁盤と思ひしにやとひしとや
○求聞持堂 又これを明星堂とも云ふ密宗の僧至実の霊名称にて是は実の事なり ○文殊
堂 ○極楽橋 求聞持の前に有清水不絶ところをいふ他邦にいふ ○子安地蔵堂
○阿弥陀堂 ○二王門 石橋を架る みなさ川にて首は杖たりし ○熊野三社宮
往古此門に勝峯山の額ありし額は翁岳と改むこれは元室海右実恵の作 ○連珠橋 巳
なり池 ○まゝの池 竪十間よこ十六間許池中翁字岩といふあり即ち
御手洗の池之二王門の前也
○雨宝童子宮 池の左にあり ○明星水 二間四面の堂の東にあり ○手向地蔵 明星水と吾海院の間にあり志不の古人水を手向る
○経ヶ峯 朝熊岳の絶頂をいふ ○龍池 六月一日の外人の知ぬ所といふ ○明王院 真言宗本尊不動明王護摩堂あり 此院弘法より六十余代続くといへり
○三基院 二王門の乾にありて 滝頂曼陀羅堂之 ○随泉院 左にあり 禅宗也 ○与楽院 ○矢追地蔵 赤毛の宝珠より出現し
給ひしとぞ 仏明天皇の御衣をきてましますといふ ○観音院 又間四面明星水の右にあり禅宗也
○吾海庵 本尊地蔵菩薩 俗に奥の院といふは此金剛證寺の奥の院は一里ばかり東
天長に建立して禅宗之地蔵堂三間四面 前の方にあり九奥の庫裏寺といへる是なり
堂下に松下河村のつり舟 飛島 渺茫などの漁舟行きかふさまいとおもしろし又富士見台有勝景の一奇観之松杖翁樹と生茂
の情くもすけにたゞよひて海上七里伊勢の海は水へだし入て庭中の泉水のごとし尾張三河
東海への眺望より帆影に帆あげて藤岩に行るれ蒼海そこともなくおのづさまあり

又あの身は色も形もなき物をいかでかやう迄え行る名もなき心も言も及ばずぞね
○薬師堂 吾海庵の境内にあり ○涅槃塚 ○芭蕉翁の塚
神がきや折りひもかけを涅槃像 はせを
○稲荷社 石同 ○舎利堂 毎年八月廿三日供養あり天竺伝来の舎利といふ ○開山堂 石同 ○東岳和尚
の像 毎年五月廿八日開山忌法事又七年八月廿四日羅漢供あり ○七社神 毎年正月廿八日に開帳あり翁熊の鎮守の宮にして法光院にあり
路すがらいく世をねらん朝熊やまへ出てたけ杖の月かけ 荒木田延季
◢是より田廊をまはり二王門へ出る又田廊ともすぐに行ば往古の本道にて
堅神村へ出る一里之此本道より西への下乗石あり
◢翁熊のみねへ戻りて廿二町の坂を下る茶屋水茶屋にて少々休みあり
並木のさくら左右にあり絶景いふばかりなし
朝熊村 茶屋より二十二町下る所に茶屋あり此より二見浦あり二見へ行には塩合をいづるより上
道あり左りは山田道なり右は鳥羽海道を経てかゝれば二見へ往く一里余又翁熊村より田村との道あり
石城山永松庵 朝熊村にあり此境内に秋田城之介実季墓あり高乾院殿前侍
従実巌傑宗空大居士 万治二年己亥十一月廿九日 安部実季入道と記せり是は今奥の秋社

朝熊奥(あさまのおく)
呑海庵(どんかいあん)
富士見臺(ふじみだい)

曽聞人説思重々
呑海庵前望士峯
四十由旬半空雪
雲間一朶玉芙蓉
村庵


朝熊金剛證寺
本堂
弁天



其二

宇治より下条石迄

六十町

瀧の宮
汐干石
瀧の宮

小朝熊社

国家の祖之國政不直の罪を蒙り此所に左遷し終に卒を今に此田家より祠堂料をおくらる其塚ハ五輪之塔なり是ハ歌道に達しこ能書の名あり 此所に哉年住給ひしや息女と葬しの法名も云帳にあり まこと哉今も此の家へ秘方を傳へらるとぞ

○同寺に福原右馬助墓あり 此碑高サ四尺余横二尺斗苔むして文字見へわかれず

○一任殿順積道薀禪定門 濃州大垣城主福原右馬助 慶長五年十月二日

○心誉一諾居士 家臣福原喜三郎 ○又真得如珍居士 家臣名字不明 碑二ッ有

△朝熊村西の出口より小橋を渡て右へ行バ二丁ばかり行て田楠辺村に至る

山田ゟ之朝熊村を過て一宇田村へかゝる道の北中ほど右へ行ば東康海村にあり

小朝熊社 康海村東山上にあり 儀式帳にハ祭神櫻大刀自命苔虫神朝熊水神三座也今ハ櫛玉命大歳神大山津見命を加へ六座とす内宮摂社二十四座乃其一也 寛文十年大宮司精長朝臣旧地をひらき再興ありしとなり

春風に岩根のさくら咲そひて浪の花ちる朝熊の山　祭主 定忠

朝熊岳 小朝熊の宮の東益川村にあり

名所 ○櫻木里 これも朝熊村に屬せり今ハ康海村の東に今も地名のこれり

夫木
いくせんか我後世にあふさくらさまよ我のあさましの代や　中務卿宗尊

新名所哥合
朝くまや神代ゟ咲花ならで心でとまりわきさくら木れさく　荒木田尚良

鏡宮 朝熊より又附康海村の内益川村尾崎にあり 石上御前の社といふ是ハ小朝熊の社の神鏡を祭るところ也

神鏡のうへハ正治年中の解文にみゆ 社頭并に神鏡も既に其の附なく廃亡せしを 寛永年中神部社頭造立の時土中より神宝の珠ちろをあさりのことお掘出せし内に一ツの古鏡ありて是を神鏡なりとして新殿を造立し鏡を納んとするに此小蛇其外に蟠伏して是を依之神鏡なりとまうして新殿の内に蟠居を入く恐懼して今に鏡と共に神祚と祭れりと云 此所に獅子伏石湖干石ともいふ

後拾遺
神代より光りをとめて朝熊やかゝみの宮にすめる月影　隆弁

益川山 朝熊山乾の方之背朝熊宮此所にあり 俗にヒルカウ山又ヒルガウ田といふ 長明伊勢記にひる川の横根といふ是也

古歌湖と合濱によミ合せり

康海社 西康海村田中にあり 不知稲依比女命 大歳神の兒 一座内宮の摂社

湖合 通縄にわたり二丁への江河之又十能川のあたりにて東西の湊より落る湖の崖にて合ふ落く湖と湖より流れ落る湖の干る所あるにより此所を湖合といふ其所の辺りに茶やあり

両太神宮の御塩を汲む濱あり 此所を湖合と号て一二町斗行けハ左の方新に濱へ行ゑまで本ゟ六八丁之の傍に新堀濱と標石あり ○破石 右の方にあり巨石なり

○湖合濱 湖合とハ大ミるみと神社の御前より満る湖と松下江村より廻り来る塩と行合ふ名付しとなり今ハ江村の方よりの塩海まむもまて行あふところなり

夫木
月ハまくひる川ふに雲消て光をもらちぬ湖あひの夜波　長明

敦古

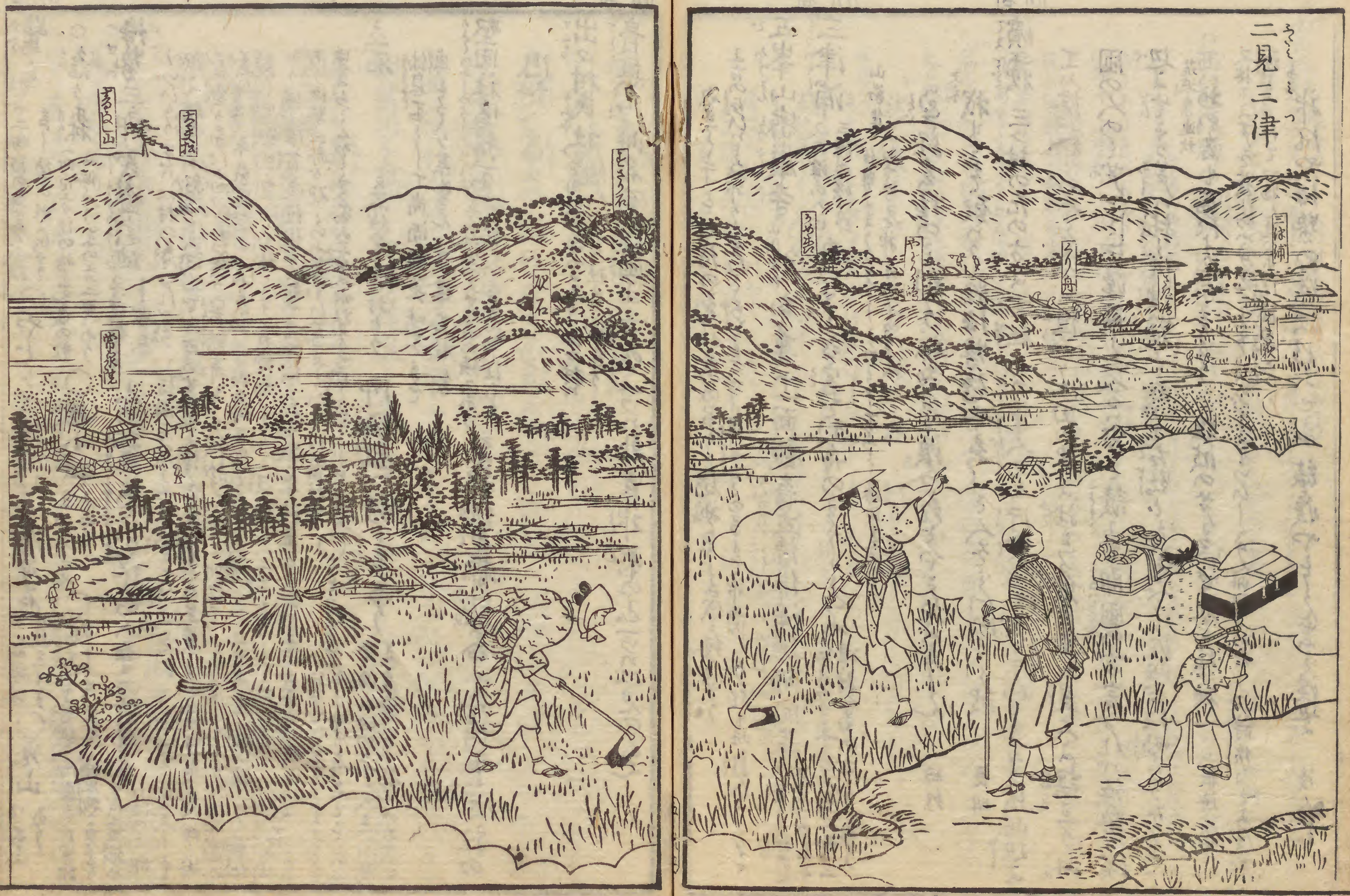
俗伝に三津村の住家次が
先祖に古の古歌と伝へしる
本条に近とるがまゝし
されば謡曲に著作せし
其古も二人たちまち家次
とみへたり其実否は
しらざれども法園一見
の途に航泊してやがて
籟生し句毎をめづらしく
古の縁故にて我に季節
先にめぐりあひ因地との
物がたりをき入つれし
は是又伊勢や日向の
古語ともいふべき
それや

山田原村 塩合のさし入の村三津村のつゞきなり 左の歌ハ西行物語にハ後鳥羽院の縁に付てよミ玉ふとあるを川合ハ入江が原とよミたるや実否知
新古今
いさゝともきたきをせにせん附る山田の原の杉のむら立　西行
○西行法師の旧跡 山田原村の寺ありしかども今ハ廃して安養山とも西行谷とも云 宇治の西行谷よりハ前に住居せられしにて年数も長かりしやと覚ゆ 撰集詞書にある趣の山家住居なりしと云 今ハ畠也 そこに二三本松ありあり宮川落合ハ此地をく擬ゑし 此所ハ溝口村の領なり ○隼人古墳 塩合へ行西川をさかのほる二尺ばかりの石たてり 里人此所を隼人塚と呼ぶを世紀後爲郡長池村隼人と云者戦死せし墓といふ天文の乱に村山掃部助武則が党二人に立籠りしといふ内なりや
三津 朝熊よりの道と山田よりの道と出合にて此村の中に家次が末葉小村某と云る郷家 あさくまより五石浜と云又十町の間なり が家に系図有るよし皆此家に蔵して弟かとへり 伊勢三郎が太刀又其右の弓と云ものの傳来を 末弓ハ元長三尺五寸元柄ハ米地の結の上に紙巻にて 八枚の短冊縁に付たる弓の本末に書あり 神子孫家にそありけれども此 ひくも長きの弓ならむ
八枚の短冊て
まどゐにそ居るさかづきけふもかひなてたかぬ為におふちとる しきを結ぶ花のさかりとなれるはちりうく乾きかや蝉とふりん 数此露りも此割や其の中のをくしさ紀がり門たゞしなりたる ものも名も有りなりてとりのなるふはの山しハ伊勢の名ありそ 宮のかひての中 此多くさすまやがくまに似くまやうさまに似ど る又振分の神も告しめせ又十治の川の清さあを中く 吹きし黄かし南ハまくひろし白みし宮の守にそめいろのやま

冬されて丁をし給の菜比露のなかり菽神のひよき代も経にたり 上古のおひハとる神のなほもくまとまてせし禅平とての弓まて神事くしく紀も此郡ひかりくそ
五峯山密巖寺 山田の原村にあり 本尊十一面観音立像佛通禅師開基 五峯とハ鷲峯など五ツの峯をいふ
三津浦 又三津の入口三津の濱ともいふ 舟出をしつゝ家を出舟のまゝにしとふ 俗にくり舟ともいふ二見郷三津村の南の方にあり
山家集
伊勢にまかりたりけるに三津と申所にて海辺春望と云ことを神主どもよみけるに
過ぎし彼岸(?)塩のしほより船出して浪の花とやさきてに見えけん　西行

濱荻 三ツ村の左の方に古跡あり里人の云伝ふ伝紫式部てなかり又かまりたる所此辺にてハ濱荻といふとそ今ハ僅だちり田の中に残りたる所と云哉を云是大に誤まり此国の人のこし芦とさして濱荻といへるハ古き謗るて即國の方言なれば伊勢の濱辺に生ふる芦ハおしなべて濱荻といふべし古跡といはるべからず此所に限らざるなり
夫木
我もさそ思はるかはく伊勢路や濱しる人をこしのうら波　長明
菟玖波集連歌
物の名も所によりてかはるなり　難波の芦は伊勢の濱荻　救済法師
又按るに芦を荻といふ事上古にハかつてまゝなりし事人此國にかぎらぬ詩作るもの濱荻とつゞけて一物とす其余說楼(?)著之
新古今(?)
神風や伊勢の濱荻折ふせて旅寝やせん荒き濱辺に　読人不知

二見三津（ふたみみつ）



鷺島 一二町沖の海中に小松多し 鷺の形に似たり ○やどりが浜 右の方にあり ○御座石 是が西一町ほど中程よりかず ○九山 日の方にあり

○鵜ヶ森 一町程南沖の海中之亀の形に似たり 東の方二町程にあり ○姫小松 東の方三町にあり ○橘江 此処に古橋の旧跡 今に其旧跡の見ゆる

伊勢三郎義盛宅地 三津村より山の林なる泉院といふ寺の竹林なり 義盛は江の三郎といひし者にて江村の産なれば是れ後国名なりよくよく嘗て始めの殺を罪によりて久しく鈴鹿の獄に繋がる縁あるに及んで上野の荒蕪に住んで盗賊を以て生業となす 義経奥州へ下る時義盛が家に宿り義盛が容貌常ならぬ故是を誘て遂に相従ひて君臣となりし後木曽の義仲並に平家追討の時京師に至り又三郎も共に先陣として西国八島壇の浦にも軍功多く宗盛教盛を生捕にす 義経都を去るに及んで共に有りしとぞ伊勢国に守護首藤経俊を雍ぎ経俊これを拒んで故に遂に義盛自害す ○硯石 山根の石あり伊勢三郎が硯とせし苔生ひ茂まれり 面の中にありて水たまりて旱にも乾かざるといふ ○をさう岩 硯石の上にあり名とせり

立石 立石浜の西の村なり 御塩殿へ行く道にあり 宇治山田の人立石浜にての茶屋と休息所として尚酒飯其味をよくして賑はひ甚盛んなる屋楼を社觀

堅田社遥拝所 立石村出て右の傍にあり 一町余り入りて森の内に社あり 祭神佐見都比女命一座 内宮末社の内之

出口村氏社 堅田社の向ひにあり 出口村の氏神なれど社もなし

音無山 此名当国に二ツあり 一ツは外宮神前の山 一ツは二見の山也

二見の音無は鴨長明が伊勢記に

二見の音無山は人々のぼりて遥に海山を見るに東は三河遠江駿河なども見えて富士の山がより見え西良に当つて甲斐の白根信濃の山あり小に美濃尾張の山どもの見えより加賀の白山見え西乾に多度の山鈴鹿の三ツ子山西に布引山山伊賀国の山ども名も知らず南は朝熊山志摩国の方に朝熊川を隔て宮川の横根と云山あり其山の西のかたに鏡の宮御座しまし海山も遥に見えて波まてかなん云云

御裳濯集　　皇太后宮常陸母

音無の山の外まてきこえけり思ひの子さるさを鹿の声

六百番歌合　　顕照

音なしの山時鳥いかにかきて鳴くらはんやしも

松や何を風やむしの風なりぬいつまて秋の音なしの山

太夫松 又伊勢三郎が鎧掛松とも云ふ音無山の上にあり 大木にて名木となる 長が城跡あり 太夫松の名あり 廻船の目印となる ○城跡 伊勢三郎義盛が宅といふ 仁木充成義盛

○是より二見浦立石浜に至る 其道を行けば是より船路の列に加へて其処に其船路の堀川されより船を出して浦々に寄る

伊勢三郎義経に見へて主従を契る

これを島めぐりといふ

○山田より二見の順路

河崎 神田村続き山田より二見まで二里 宇治より此まで二里半余なり 此地毎日魚市あり民屋広く甚賑し

伊勢船河崎へ着岸となるまで家々の船の往来さき湊なり

○河辺里 河崎の古名

新名所歌合

をとむ人やなれはまたに集らん河辺の里に飛ぶ蛍かな　荒木田尚長

二軒茶屋 河崎の往還にて茶店あり又山田の上郷より小篠坊を経て宮まであるもあり さきところより舟をとり大湊神社まで二丁ばかり辺見え抽をろもよう

黒瀬 二軒茶屋を右の森の内に社あり此村の氏神なり橋 諸見公を祭るといふ

常楠子 宮の傍にあり 東都興福寺の橋と同種なりて其実なりて小之 楠子者即興福寺の橋のらざるもしとそ

海寿王いふ人は貞なる此実を求めて代りになり下されたる故とそ

おのころは伊勢にある人むとはまでたより嫉しき花楠子哉

按るに此歌は誤りなるべし此歌は慈鎮大僧正の詠にして慈鎮は天台の座主へ此歌は伊勢の人の送りしか又は愛ぬ花なるべし ○諸見公の母は懸大養良宿祢三子代とよく伊勢の人なりけるか此宮は楠子の古跡なる橋の出母なる然語ひて諸見に給ふの家集に見えたり

万葉集

常よろ花は実さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれ弥けとは常しとさへ木　聖武御製

通村 沼会より東流に往昔より此所に楽人往居せしが此の所より退

撥して申楽とあまつり 伊勢三座の猿楽は勝田、吉王、和屋は勝田は此村にあり和屋は一志村にありて今も申楽一座にてある若の名跡なるべし

箕曲氏社 西南の方にあり二見へ行く大橋の川下にあり

昔を流社といふ洪水に流されて爰に止まりし故称せり

○天神社 菅丞相の霊を祭りてこれを松江の天神といふ又天神瀬ともいふ ○ある城渓へ行く松のもとば右の方岸のこより 数株の雲

神社村 松原あり海上に於て一本松十貫松とて今もあり

御食社 神社村 祭神速秋津彦命外宮の摂社十六座の内延喜式帳に水戸御食都神社といふ 若宮社 大村にあり

○擁尾橋 川崎より神社村へ通る道 ○河原渕社 祭神沢女神 擁尾にあり ○河原大社 祭神川神水神 新開村にあり

小林御役所 小林村にあり 南に二見へ出る森に虎丸孔雀丸御船倉あり

○大湊社 祭神千尋帆夏命 行かよふ村にあり 延喜式帳に載る式外八社の内也

大湊 ある城渓海を渡りて向にあり今一志村より船にてわたる人多し 紺屋をとひ舟の着なり浪除の塩洲をきて築る事凡百二十軒ある舟人入江にあり古川といふ 古名小野湊なりといふの流るあしこ

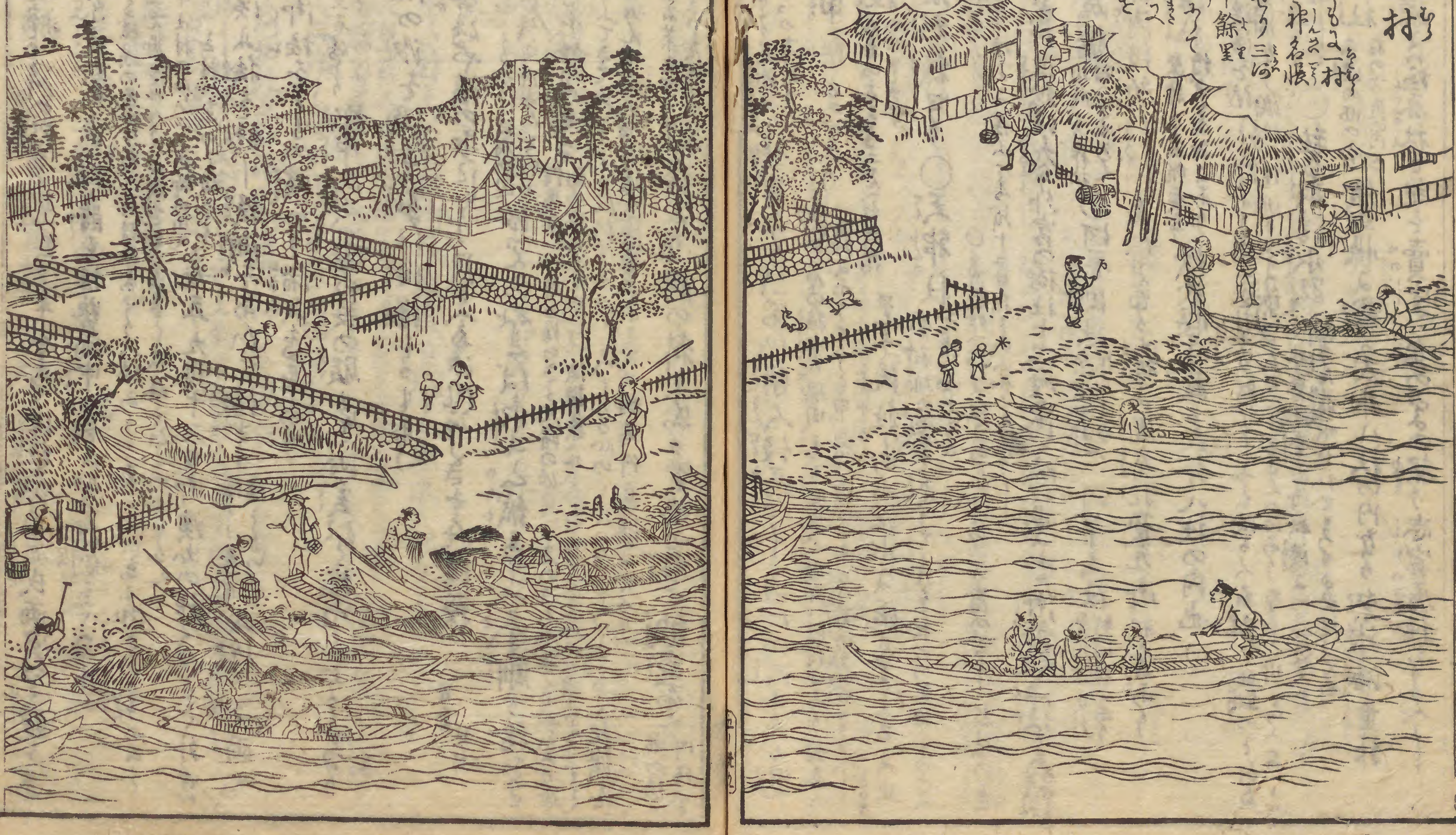
○鶴取清水跡 右神宮遷幸の御船湊につけせ給へば鶴の取る名水をたてまつるとなり

志貴屋社 大湊の西の入口 右の方畠の内にあり 延喜式帳に載る式外八社の内なり 祭神海童神

神祇本源には塩屋社と記を貴字は宝の字の誤り志宝屋社なるべし

神社村

昔ハ大浦ともいへ一村なるべしと神名帳再考に記せり三河遠江の地二十餘里船路の渡口にして廻船多し又嶋巡りの船を此渚より出と



八幡宮 大湊にあり 村中にあり 川の北より祭る事なりしが社家清原氏両宮の支配を受
など其外に祭事を数へて叙爵を伊勢国中にてはかく行ふ例なし

今一色村 高城濱の東にあり此村の東より入海ありて南に向ひ東に折まがりて筆のごとく
二見郷をめぐり江村を出るまでを大海といふ川の内なり

高城濱 神社村の向ひ二見の郷の内也 今一色村の東のまへなり 毎年九月十三日御濱出の神事とて外宮

祢宜此濱に往を饒し後潮をあびて清まる 伝 長官此辺りに両太
濱ともいふ

神宮の御塩をとるの濱あり渚に鳥居あり

打越濱 立石濱より てらの汀也 郡中の人父母の喪の服を除く時爰にて塩あみをなすなり

又此濱の汐を汲みて家にて浴湯するもあり

新名所歌合
伊勢の海や浪のよするに見るは月を見汐風にあふ〔き〕き手に浜荻 荒木田延行

清渚 立石より今一色村の辺 汐ひがたに
其の磯辺清らかなる所をいふ 汐のひかざれば山も其に山城にして金剛が橋とて

又より立石濱にもつる 催馬楽に伊勢の海のきよき渚の汐貝に名のりそや摘ん貝やひろはんや
玉やひろはんや 又後撰集に世をやけのいひに伊勢国にまかりて
あくりするふてきて此しうとりんの行り夕には人ならの心のくまなきといひしてきよき渚を
いそぐなり 少将内侍 ○清き渚其余りそれは對馬竹島浦にもあり

御塩殿 立石茶屋町の西へ入 大神宮御饌の料となる堅塩を焼て納る所也 殿の後に御塩釜
宇治の館村の内也

ありその為に鳥居あり 両宮東西御宝殿を摸して造立す 祭神の御名は古書に見
えず 毎月御塩奉納の日には此所より下馬して丸辻を通りて子良
館にまゐる 宮地の入口に御塩橋とて小さき他の用には往来せず 之を
御塩橋といふ 御塩役人二見より外宮までの途中立どまる事を忌む

名寄
二見がた神さびたてる御塩殿幾千代までも浪にかけて 長明

立石濱 江村へ行路の濱也○海中左右に立石二ツの大石あり注連をはりて 此所の藻と湯に
垢離をかく場なりてこの二ツの石立並ぶ所を立石濱といふなり
いまに沐浴し汚れを洗ひ是を垢離塩といふ

夫木
さらぬだに立石濱の白浪はたへずきえつゝよする浪かな 西行

山田宮より往き詣でむ人参宮せんと思ふ人は先づ此所を経て垢離かくといふ
後にかはりて垢離をもつて宮中に入るなり

三狐神社 此社のかたはらに穴ありて是より出るなりとも 其由緒とぞいふ

二見浦 此辺をすべて二見といふ 七御の惣名也 七とは 江村、三津、山田原、溝口、荘
を東三郷と云 今一色之 是内宮領也 庄村、西村、出口をも三郷といふ 統る是出口

八まん

大湊
神境の内宇治山田大湊湊の名と別あり人家九百軒

長明参宮記

二見の浦へ出行ぬ
小松原の中にある鳥居あり
社へ見へ入を是ぞ神社の
かき塩納めおきける所之多くが
御塩殿なるべし云云

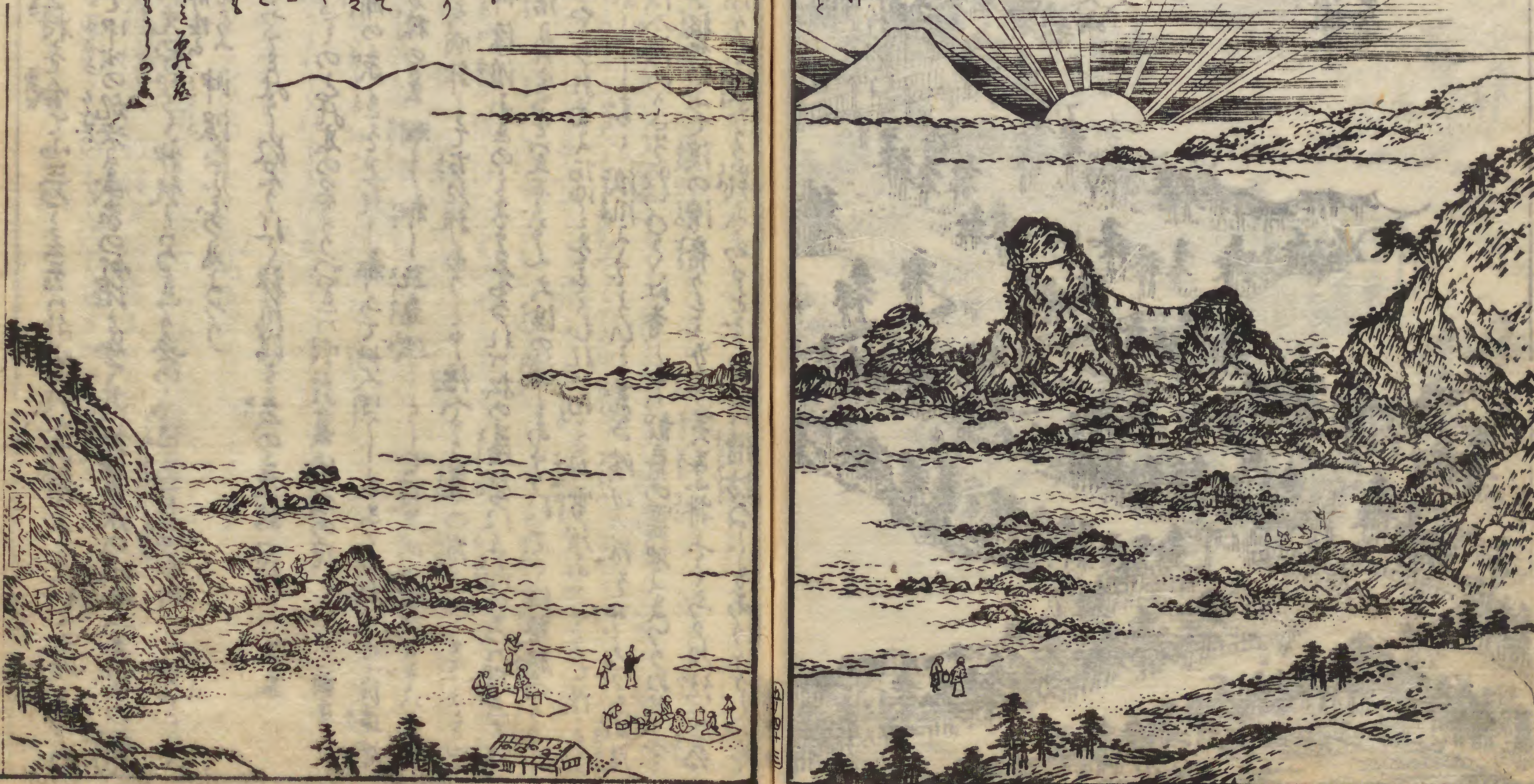
二見浦

二見ハ清き渚真砂地の
辺りの趣石や岩を立石
といひ注連をはりし二つの石
又掛まくり二見の名義
説々あれども悉く抜
きかれ足らぬ浪の手
なるがゆゑくの貝を拾ひ
塵なきあるは村ハ網引など
してなまの立ハざるも甚
興あり

或ハ立石注連ハ奥の
の縄を不らせ遥沖の立石
岩礁汐干にもまた見ゆる岩
神あり是猿田彦の
ゆえ立石を神とも云云
されどもいづれも日本紀に
海童と書てぞ海の神
を祭るなべし猿田彦と

ひとつは及ぶべからん
又海の珍珊瑚樹と号る
ものうち交りて実に
珊瑚に似たる石あり
又旭に冨士を見なる
立待汐に出ぐし
日の地下と離んと欲る
間ハ合くらべて東清
砂波濃せり

世に二見文臺といひて
硯と湘紙など書けりちを
者尾濃とかいふわたく
蓮歌せし扇を文臺に
とし名がき石の硯と
せしより蕉翁の句にも
硯かと拾ふやくぼき石の露
うきが上の湖鮎もあうしのまま



ハ後く今ハ一色村を合て山三方といふ 是ハ外宮領之内ハ郷にして之れを七方といふ
昔ハ一揆之しを中比の乱世ハ武家の領地となりて其後寛永の比今ハ一色村の長
愁訴して後ハ元のごとく神領となりて世の人皆立石浦を呼て二見と云ハ
誤しく二見山 御塩山 御塩浜 沖淀などあるによりて

拾遺愚草
まどかなるいとふてらし呼はれる神風清き夜の秋の月　定家

金葉
玉くしげふたみの浦の曙のけしきハ明ぬ甚の夜の月　源親房

参詣記云 二見浦の景色をみれば都にて伝へ聞しよりなほこの勝地にあらばと津浦
勝て思へて万株の松 烟り和し 孤島 磯にとして 百丈の巌月にそびえて
又此浦に佐美明神とて古き神ありと中伝へより宮の荒みさまざまと国
とあり 沖津浪あまのとまやるあれバ松の落葉に手向のむれ埋みて残き
神さびたり 俗に人家をば立石といへ 大淀の浦もあたりに 伊勢路のうるも
あるうかるがやら 其東に何ゆゑをとくむれバ白き砂 雪がやあざやかにして清き
衣さの名物あらバしるき 浪風にてうたふく荒き浜辺の岸を物どろうと山陰
遠く見ゆれバ入海のうちを見わたして江寺しや 観音の霊地にまいりぬ苔むせ
のかる石橋を船乗りして溪の瀬音うそうそう黄葉拂ふくふる松風
吉竹に携りて遥なる磯にとまるをたどるとハ僧坊などもありたるとうや

中伝へしど世の中ハ静かなりぬありて 禅徒の止住を入べきたよりなし 今の
住職の宗ハ寺なりけるが 煙りけず 漁舟のかげも見ゆ 波をやく 魚とも
のこりあん 中略 かの寺より林業のうらくによりて眺望もろもろ曲浦法波を隔
てあれ 松檜によりかかるがおとし 巌やこの音に楽しまききのままなりんと
云へども 誰に問べしとも覚へず 中略 霞ようきて河浜荻の風によそめく蒼海に
押りぬるかげの波間を浮びて浦辺の真岸家の景色ちる雁と
見ゆれバ海門にうつ松の帆かげハ万里の波に遠さかり後つらしとる雁か 櫓の声ハ
千尋の涯に遠く 雲の波烟の浪 特くされ蒼海のとうひ国をとうひをみるかな
中うり 伊良虞島 鳴海 深まで かしこふやと押りひみうあまのたき川を
この灘の名にるるきて押るに 波路ちかう 富士の高峰かれ多くの名が見え
て雲かかりぬるとたとれども 依菴などの中かわく風にもうごうおかろぶの心
りなしみ里の名所もつゞらく 一浦の地景とちぎれ此浦の寺特なるハのち
あたバ入りこゝそとひ待まど 老ぬるまでれのそぶて
苍の浪立つ入るべきよすなりぬバ二見の浦の名がもたのまん
磯にかけのあとはたえ ひ行に何かまてに 心をとめし古寺あり安喜山と申
不たりり気を西行上人の結びかる旧跡とかや そこうけたなまのいる 中略
宮川の落合をも此所に集めかれと そうけたまふる 維まばば 両宮の河

蘓民将来社

素戔烏尊蘇民に宿を乞ふ

東指掲傳曰素戔烏尊根の國へ下り給ふ時風雨に苦しミ諸神に宿を乞給へども許さゞりしかバ爰に此國に巨旦蘇民の兄弟ありて巨旦ハ富ゆたかなれども心悋不仁蘇民ハ貧しけれども慈悲の心ありて尊の御宿を許して粟の飯をすゝめまゐらせしアハサの國より暴疫鬼来たりて一家を悩し給ひ蘇民が家に茅の輪を造りて帯させ給へバ翌日よりして一村の内蘇民が家のミ恙なく死亡を免がるさりかくてる別れに臨で此後疫癘流行の時は蘇民将来が子孫と書て門楣に貼しおかば此疫其禍ひ退くべしとあ教へ給ひしとぞ

人々も抵宿さるの日旧来未極不知其遠給ふをまぬかれその送りありしとぞ公ろが根源曰素戔烏尊ハ即祇園に祭年頃天王にて武塔天神ともや之南海の女子を娶て八王子を生せ給ひ彼風省の時ハ其女子に通せ給ひしより首里南海といふハ琉球國の事なり則蘇民巨旦まぞ琉球人なるべし今は琉球の名に誠来親ま などの名あり琉球と龍宮といひしにて沙渇羅大王の女といふハ實ハ琉球の事なるべし

本文くはしくハ南海の事なり

宮も此風俗をまなびて一寺の僧俗も彼路次てそなへひ行りしに今は磯辺
にいまさりしが芝り金をそこづりは此処にとゞまり波に叫ふひろひし也
の路しは船ぬぐるゑんよもあし〳〵云云 下畧

附言 毎年十一月十五日の夜子刻大湊二見浦の沖汐干て鞍しく陸となりて破船の形見ゆ
ことおろかなるもありとかれと七汐日といひくを国の奇観之七里あるさかうう三河国
へ参詣のもく行とらへ〇掛るに環境吉浦の沿下三月朔日より三日日よりなりしこと紫
早友の海大三十日海藻刈の沿すあり 肥前国志に出る六月廿日七月朔日のこともにく
其夏晦朔ぞの日よありて他日よみさるなしされば汐ある月よ修行の人此なるの理ならん揣べし

興玉石 立石より八町斗沖にあり 志ほひれは見へ汐満ぬれば見え〳〵など是を神としての石を沖の霊の石と ○鰒石 ○乳
母懐甚外様くの石みえて此辺二見石とて和に白きは浅く石の帯名る東の宅そ

江村 八町より 立石へ弓の東南 山のしたにあるあり汐干は磯だてひとまゐる

附言 小臣権少ね源国永卿の家集に二見破却のなるにお愛田丸よるをり馬を出させ七羽のことゐ
一對よやぶれにとらへ承給つるの城に於とよろづつひ甲斐なくしてへなてゝ人どして落行けれは
なにかなぐさまくそことれと氣めどにつてたましきそうれ

潮音山大江寺 真言宗本尊観音 二王門あり 鄒は空海の書此寺甚旧し土佛あり 参宮記
にもたちさ寺の破れしよかんしるるをあり

江神社 江村の巽三町にあり 祭神長口女命大歳御祖神宇賀御魂命 三座之内宮摂
社二十四座の内也 儀式帳ニハ江村の西とあり ○両岸に石あり 猿田彦石 猿田姫石 ○亀森 一名平松 日本にあり

松下 總て向ふに 此村の東南六町に森あり天王社座ます

○神獲民社 一説に蘇民将来の社といふ 天王の旁に在るを子細画上に記す

蒔絵松 三津浦と江村との松原をいふ金塚の崇によりて名あるもいふなし
金葉集 王くしげ二見の浦の貝あはせまつるにも見ゆれ松のむしろ 大中臣輔弘
参宮記二日 江寺より蒔絵の浦にいりて眺望ありて小曲渚波をも濯ぎてさまぐ〳の松絵は画ろおもしろ
これや青よさし蒔絵の松なりしんとみえ後に向べしたがつべし破菜とも物よく其前に申書

浦松似畫夕陽裏 老眼摩娑費苦吟 水自細流列天心 雲晴雲起山
高下潮去潮來月淺深 六十余年漂泊處 江湖風景不知今

○蒔絵明神 江村より三町程南の林中に社あり 江神社と同じ内宮神楽歌に此御名を唱
ふるところ也

此余も湊巡り勢国の上に水路の大概を記すといへども
旅人のゆくてにも遥りにつれてあるひは汐合より三津江村と
廻り二見浦清渚高城大湊川崎へ偏舟をあり又江村より舩
を借て高城浜との浦ぐを見さゝる羽よし破道よ至るもまた
便道となれり

国立公文書館
National Archives of Japan